英国兵捕虜の墓
親族ら追悼式

熊野市紀和町の旧紀州鉱山のふもとにある英国人墓地＝🔑＝で11日、英国兵捕虜の追悼セレモニーがあった。元捕虜の親族や関係者計9人がイギリスから来訪し、この地で亡くなった英国人16人の霊を慰めた。

熊野 16人が埋葬

セレモニーは、1992年から日英の和解と親善のために、旧紀和町出身の恵子・ホームズさん(66)＝ロンドン在住＝の呼びかけで始まった。これまでに通算300人以上の元捕虜やその家族らが参加してきたが、最近は高齢化し、2、3年置きに開いているという。

今回は、元捕虜が実父だったスーザン・リチャードソンさん(63)とその家族をはじめ、インドネシアで捕虜となった元英国兵が出席。地元からは墓地をボランティアで世話をする老人クラブや、これまで訪れた元英国兵らを世話した関係者計約30人が参列した。

墓地に眠る英国兵士16人を追悼するスーザン・リチャードソンさん（手前）＝熊野市紀和町

「時が経っても弔い…感謝」

🔑 英国人墓地

シンガポールで日本軍に降伏した英軍兵士約300人が1944年夏から終戦まで熊野市紀和町板屋（旧入鹿村）の旧紀州鉱山で働かされ、16人が病気や事故で死亡した。鉱山ふもとに墓が建てられ、地元の住民たちによって守られている。

セレモニーで、スーザンさんは「父は生きて帰ってきたが、父はここで亡くなった仲間をずっと忘れなかった。こうやって地元の人が弔っていることに感謝したい」とあいさつした。

戦時の紀州鉱山のことを知る地元老人クラブの更家盛一郎会長(76)によると、英国人捕虜は紳士的で、仲良くしてくれた。終戦で帰国する時は、お互いに手を振り合って、英国兵たちが乗った大きな飛行機が上空で一回りして去っていったという。「ここで眠る16人のために親族や知人が今も来てくれることはありがたい」と話した。

英国人捕虜として同鉱山で働かされた義父を持つジョン・スミスさん(65)は「私たちのために墓を作ってくれ、さらに亡くなった彼ら（元捕虜）のことを忘れないでいることに感動した。こんなに時間が経っても追悼していることを父が知ったらどんなに喜んだことだろう」と話した。

恵子・ホームズさんは「この墓がなかったら、この活動はなかった。地元のみなさんが動いてくれたことに心から感謝したい」と話した。

11月1日には、地元の紀南国際交流会による第21回英国人墓地追悼式も開かれる。

（百合草健一）